



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

News Letter

第 57 号 2012 年 1 月 17 日
発行：日本青年心理学会事務局

■ 目次

<第 19 回大会委員長挨拶>

伊藤 裕子：第 19 回大会を無事終えて

<名誉会員挨拶>

秋葉 英則：青二歳から玄人へ、それは無理

<学会賞受賞者挨拶>

白井 利明：第 5 回学会賞を受賞して

<特集>日本青年心理学会第 19 回大会

茂垣まどか：自らの研究姿勢を振り返る

松木 太郎：第 19 回大会に参加して

登張 真稲：青年心理学会第 19 回大会に参加して

南 雅 則：日本青年心理学会第 19 回大会に参加して

<書評>

藤井 恭子：吉岡和子・高橋紀子編著『大学生の友人関係論』

日野林俊彦：平石賢二編著『思春期・青年期のこころ 改訂版』

<広報>

都 筑 学：研究委員会ワークショップ開催のお知らせ
事務局からのお知らせ

<第 19 回大会委員長挨拶>

第 19 回大会を無事終えて

大会委員長 伊藤裕子（文京学院大学）

過日、東京は本郷、文京学院大学において第 19 回大会を開催いたしました。両日とも穏やかな好天に恵まれ、参加者も 115 名とまずまずの出足でした。プログラムも、口頭発表 29 件、自主シンポジウム 2 件と盛りだくさんで、特に自主シンポジウムでは、プログラムが混み合っていることもあって、講習会や研究会シンポジウムとぶつかり、出席した方にも出席できなかった方にも申し訳なく思っております。

東京のなかでも本郷と地の利がよく、そのため発表数が増えたものと思われませんが、本学会の特徴である“たっぷり時間をかけて質疑応答する”ことを保証すると、今回のように貴重なプログラムがバッティングする事態に陥ります。今後の課題だと思います。

本年は未曾有の大震災に始まり、プログラムのなかにもそのことを受けて、ともに受け止め考えていこうとするものもありました。来年は第 20 回大会で、人間でいえば二十

歳の成人、学会としても一つの区切り目になることでしょう。本学会のさらなる飛躍を期待したいと思います。

<名誉会員挨拶>

青二歳から玄人へ、それは無理

秋葉英則（大阪健康福祉短期大学）

本年度の学会総会で名誉会員に推挙されたとの報に接し恥ずかしいことしきりです。これまでご指導いただいた先生方、研究仲間に深謝。理事長の後藤先生は会員証をお届け下さった折、次のような私信をそえて下さった。それは今から40年前1970年に名古屋大学で開かれた青年心理学会の折の小生の発言を思い出してくれてのことでした。文字通り“青二才”の時代のこと。その出来事を思い出せませんが、その後の小生の「研究者」としてのありようをたどる契機を与えてくれました。

今、こうして名誉会員への推挙をうけて感想を問われるとき年令にして古稀を迎え、これからのありようを考えさせてくれます。それにしても、“人は人にホレテ人になる”という先人の教えに学ぶことのみです。

恩師宮川知彰先生（東北大）、関西にやってきてご指導頂いた津留宏先生（神戸大）、学会での問答の折、多くの教えをうけた依田新先生（東大）、久世敏雄先生（名古屋大）はじめたくさんの先達の方々を思い出しています。その方々は青年心理学徒としての玄人とよべる先生方です。これからのわが人生にあって後輩の方々から思い出される玄人像を求めて歩み続けたいと考えています。その歩みの第一歩は“こだわって生きる”ということにつきるのだらうとおもいます。

2011年という年にこうした想いを湧かせてくれたことに感謝し、新しい年が日本の未来に明るい展望を与えてくれる年になるよう祈念してペンを置きます。（2011.12.13記）

<学会賞受賞者挨拶>

第5回学会賞を受賞して

白井利明（大阪教育大学）

この度は、日本青年心理学会賞を授与していただき、ありがとうございます。大変嬉しく思いました。他方で、学会賞はもともと若手研究者を奨励するために設けられたものだと思うので、大変申し訳なく思います。

言い訳めいたことを申し上げますと、受賞論文は、20代から30代にかけて考えたりデータをとったりしたものをまとめたもので、早く前から書いていました。長い間、あたためていたのですが、一向に深まらず、結局、諦めて刊行したものでした。

受賞論文は変容確認法という研究方法を提案したものです。変容確認法の原初的なアイデアは、調査結果を本人に返して自己理解を促すということです。みなさんも授業の取り組みとしてよくやられるのではないのでしょうか。そして、本人が気づくことをとおして研究者が気づきを得ることを目指しています。本人（青年）と研究者（大人）の世

代間交流の過程を法則化していけば実践的にも意味のある青年心理学ができるのではないかと考えています。関心のある方は自由に使って下さい。

変容確認法を外に出したとたん、重荷から解放されたかのように、新しいアイデアが次々に浮かんで来て、今、それを「人生構築理論」「社会構築理論」というかたちでまとめています。受賞は、自分のことばかりしていないで、若い人を育てよ、というメッセージと受け取りました。学会のために微力を尽くす所存です。今までにましてご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

＜特集＞日本青年心理学会第 19 回大会

2011 年 11 月 26 日（土）から 27 日（日）にかけて、日本青年心理学会第 19 回大会が文京学院大学にて開催されました。大会委員長の伊藤先生をはじめ先生方や院生のスタッフの方々にお礼申し上げます。大会自体も、刺激のかつ有意義なプログラムでした。また、懇親会では、関先生のご挨拶もあり、心温まる大変有意義なひとときとなりました。今号は、第 19 回大会についての特集です。記事を執筆いただいた先生方には厚くお礼申し上げます。

（担当：小沢一仁・渡邊照美）

自らの研究姿勢を振り返る―第 19 回大会に参加して―

茂垣まどか（立教大学兼任講師）

私にとって今大会は、自らの研究姿勢を振り返る機会となったように思う。

1. 統計分析の結果は何を示すのか：セミナーにおける小塩真司先生の、「共分散構造分析は変数関係をモデルとして統計的に検討する有効な道具だが、分析は研究者が準備した変数を超えず、因果関係等の設定には理論的な根拠が必要だ。」との主旨のご発言が印象的だった。もちろん目的に応じた変数設定が重要だが、ある心理的事象をその変数、結果がどのくらい示すことができるかを念頭に置く必要がある、とあらためて実感した。

2. 自分の人格発達観の自覚：大会記念講演における本田由紀先生の、経済の悪化や就業体系・家庭での価値観の変化等が青年に影響するという分析や、社会システムを変える必要があるという主張はとても興味深かった。と同時に、「社会構造の変化を青年は主観的にどう認識するか」「同様の辛い社会的状況でも、立ち向かう／立ち向かわない青年がいるのではないか。その理由は何か」という問いが生じた。さらに、本多先生の社会学的見方に対して、私自身の人格発達観が青年の主体性や主観に主眼を置いたものであり、「主観的に認識された“外界”が、人の精神的健康や人格発達に影響する」、「人は苦難の状況下でも主体的に成長する生き方を選択しうる」と考えていることを自覚した。指定討論させていただいた翌日のシンポジウム「苦難の状況下における心理学」でも、このことを強く意識した。普段は当たり前のこととして明確に認識していなかったのだが、おかげで、自分の研究全体および個々の研究の目的を精査することができた。

以上のことを通して研究への動機付けがさらに高まった。青年心理学会の持つ“パワー”の凄さを改めて実感し感謝するとともに、今後の研究に役立てていきたいと考えている。

第 19 回大会に参加して

松木太郎（神戸大学大学院人間発達環境学研究科心身発達専攻）

この度、日本青年心理学会第19回大会にて研究発表の場を与えていただき、心より感謝申し上げます。本大会にて私は「大学生における心理的居場所と攻撃性との関連」と題して、卒業論文の一部と今後の研究の方向性について発表させていただきました。

今大会は私が初めて参加・発表させていただいた学会ですが、発表形式が口頭発表で、かつ持ち時間が45分もあるので、発表の直前はプレッシャーに押し潰されそうになりました。しかし、発表を振り返ってみると、私の至らなかった点や、今後の研究の発展に繋がる貴重なご意見やご指摘を先生方からいただくことができ、大変充実した45分間でした。

自分の研究発表の場以外でも、有意義な時間を過ごさせていただきました。他の先生方の研究発表や、現在の青年心理学研究のあり方に迫る各シンポジウムなどからは、青年心理学を「考える」にあたって必要不可欠な視点をいただき、私の青年心理学研究に対する狭い視野は大きく押し広げられました。また、懇親会の中では、先生方と真剣な議論をさせていただいたり、時にはご歓談させていただいたり、本大会ならではの楽しみを心から満喫させていただきました。

最後となりましたが、ニューズレター執筆の機会を与えていただきましたニューズレター編集委員の皆様、研究発表の場を与えていただきました第19回大会準備委員会の皆様、発表の司会をしていただきました高木秀明先生、私の拙い発表にご参加していただきました皆様、そして、多くの知見をご提供いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

青年心理学会第 19 回大会に参加して

登張真稲（文教大学非常勤講師）

この2年ほど、青年心理学会に行きそびれていましたが、今回は東京での開催ということもあり、参加させていただきました。

最初に、SEM についてのセミナーに参加しました。共分散分析モデルは、使える範囲で使って研究していますが、十分によく分からないところもあります。本などの説明は分かりにくいことが多いのですが、小塩先生の説明は分かりやすく、頭が少しすっきりした気がします。また、いろいろチャレンジしてみようと思いました。

私はもともと、息子が中学生のとき、子どもの気持ちが分からなくなって、児童期から青年期にかけての発達について、急に勉強したくなり、大学に戻ったのですが、研究を始めてからは、主に英語の文献を読んで得た発想をもとにした研究をしてきたように思います。息子はもう大人になってしまったし、今回の学会では、今の青少年の実際の様子や問題を感じ取れるような研究やお話を聞きたいと思いました。

研究発表は、「環境移行」についての二つの発表を聞かせていただきました。どちらも、小学校から中学校への学校移行についての研究で、子どもたちの心の中を想像しながら、

興味深く聴かせていただきました。

本田由紀先生の講演（若者と「能力」）では、若者を取り巻く社会的な状況と、若者の意識の両方を捉えていくことの大切さを改めて感じました。

研究委員会企画シンポジウム（児童期から青年期にかけての友人関係と青年の自己形成）では、友人関係と自己の確立との関係を改めて考えることができました。

今大会の企画や準備をしていただいた先生方に、心よりお礼を申し上げます。

日本青年心理学会第 19 回大会に参加して

南 雅則（宝塚市立長尾中学校）

この度、日本青年心理学会第 19 回大会において発表させていただきました。特に今回は準備委員会企画セミナーを非常に楽しみにしていました。これまで SEM を用いた分析手法を用いたことがありましたが、分析の途中でどうしようかと悩むことも少なくありませんでした。今回、小塩先生のお話を直接聞くことができたことで、小塩先生の本に書かれていることもよく理解することができました。

今回の発表は、2 年前に兵庫教育大学神戸サテライトで開かれた第 17 回大会で初めて発表をさせて頂いた際、座長の先生をはじめフロアの先生方から頂戴した貴重なご意見やご示唆をもとに、改めて取り組んでいる研究をまとめたものです。プログラムを見た時、発表者は大学の先生方や院生の方々ばかりで、はたして自分の発表にどれだけの方が関心を持って下さるだろうか、どれだけの方が聞いて下さるだろうか、と心配していたのですが、稚拙な内容であったにもかかわらず、方法や結果の解釈に至るまで、座長の平石先生、フロアの先生方から多くの貴重なご意見やご示唆を頂くことができ、今後の研究を続ける上での大きな励みとなりました。心より感謝しております。

私にとって青年心理学会は、中学校教師としての自分を研究者の立場から見つめ直す大切な場となっています。第 17 回大会から続けて参加させて頂いていますが、毎回参加するたび、学校現場での実践と研究をどう繋ぐことができるのかということを感じています。また、他の方の研究発表を聞かせて頂き「なるほどそんな見方や考え方があるんや」と思うことしきりです。これからも青年心理学会で学んだことを学校現場で生かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、ニューズレター執筆の機会を頂きましたことに心より感謝申し上げます。

<書評>

吉岡和子・高橋紀子編著『大学生の友人関係論—友達づくりのヒント—』

（ナカニシヤ出版、2010 年 3 月刊、本体 1500 円）

藤井恭子（愛知教育大学）

編者の吉岡さんは、青年期の友人関係における心理的距離をテーマとして長く研究を積まれてきた人である。また、高橋さんは自己の問題や居場所といった観点からの青年理解を深めておられる。本書は臨床経験をもつこのお二人を中心として、新進気鋭の若手陣（つまりそれは青年期への主観的な視点のシフトが容易にできるという強みでもあ

ろう)が揃い、副題通り大学生の生の声を取り上げ、その一つ一つに寄り添い、編者らの調査法によるデータの蓄積・臨床家としての経験から導き出された知見をもとに、アドバイスを提言する足腰の強い構成となっている。一方で平易な文章やかわいらしいイラストといった読者目線の表現や、ワークブック形式の構成で読者自らに自発的な思考を促そうとする。

私が普段接している大学生らも、友人関係は自らの支えであると同時に悩みの源でもあると訴えることは多い。彼らは、友人と直接会って話をするだけでなく、電話、メール、ブログ、ミクシィ、フェイスブック、ツイッターなど、さまざまなツールを使い分け、それぞれの場で関係の在り方を模索している。また、かつての“親友”の定義も複雑化し、心友、真友、芯友、信友、神友、深友…など、さまざまな漢字を当てはめて関係を区別することで、10人以上という驚くべき数の相手を親友としてみなすことも可能になるようである。だが彼らは器用に関係を使い分けているように見えて、内面では友人とのかかわり方に迷い、悩み、さまざまに葛藤を抱えている。

この本ではこうした現代青年性から生じる悩みに直接答えるメッセージというよりも、むしろ傷つくことをおそれるあまり関わりに立ち止ってしまう彼らに、発達を促進させるような“悩み方”を教えてくれる。「心理的距離」、「自分らしさ」、「居場所」、「役割」という編者らが取り上げた鍵概念は、先に挙げた変化しつつある青年期の友人関係においても、非常に有用なものである。本来、傷つくことは悪いことばかりではない。ほどほどの傷つき体験は、自己を成長させる。健康に悩みを持つこと、そしてそれを自らの内に抱えて向き合う力をもつこと、そのためのヒントを、本書は大学生たちに与えてくれるだろう。

平石賢二編著『思春期・青年期のこころ—かかわりの中での発達— 改訂版』

(北樹出版, 2011年10月刊, 本体2000円)

日野林俊彦 (大阪大学大学院)

本書のタイトルを見ての感想は、私には書けそうにない困難なテーマというものであった。また読了後、まず考えたのは、青年心理学という学問領域や言葉は、一般にどのような印象を与えるのであろうかであった。大人は、思春期・青年期を通過してきており、さらに子育ての中で、青年期を追体験する機会も多いと思う。その意味で青年期や青年心理は、なんとなく、なじみのある自明の概念である。それ故に、青年心理を学問的に描写するのは難しいと思う。本書は、その意味で、いわば青年期の教育臨床心理学の教科書的役割を果たしていると思われる。

本書の前半は、編著者が思春期・青年期に関する心理学の理論と実証的研究を簡潔かつ密度濃くまとめ、後半では多様な著者が教育実践、臨床事例を理論も背景にバランスよく紹介してある。ただし、網羅的に青年期現象を紹介するのではなく、思春期・青年期にある子どもたちが、「かかわりの中で発達する」というところに視点を定めた内容である。小中高大の教員、スクールカウンセラー、児童相談所員等からなる執筆者のバランスも本書の特徴と考えられる。調査等を通じて得た研究者的な視点での間接的な知識ではなく、まさに青年期の各発達段階の現場の生きた知識が伝わってくる著書である。小学校、中学校や高校、また臨床の現場で何が起こり、どのように進行しているのか知る人は意外と少ないのではないだろうか。逆に大学教員として、また元大学学生相談室

カウンセラーとしても、描かれた大学生像や提言は十分納得できる内容であった。本書で指摘されている思春期・青年期の子どもをもつ親に対する支援プログラムの必要性も、指摘されてみて、なるほどと思える提言であった。最終章に、編著者が実践に向けての提言をするという構成からも、青年を援助するという教育的配慮のなされた書籍である。教育者、研究者、大学生等、青年に関心のある人たち全方位の著作ともいえよう。

<広報>

研究委員会ワークショップ開催のお知らせ

研究委員長 都筑 学

研究委員会は、これまで3年間にわたり、「青年と教育（機関）」というテーマを設定し、2月のワークショップと大会でのシンポジウムを通じて、大学生、大学院生、中学生・高校生から大学生までというように検討の素材となる対象を変えつつ、教育の中での青年の意識や発達について検討してきました。議論の様子は、『青年心理学研究』誌に掲載されています。この研究テーマの検討作業は、本年11月に文京学院大学で開催された大会時のシンポジウムで終了ということになりました。ワークショップやシンポジウムに登壇していただいた会員のみなさんに、心より感謝いたします。

研究委員会では、11月の大会時に、今後の活動方針について話し合いの機会を持ち、本ワークショップから3年間の計画で、新しい検討課題に取り組むことを決定しました。

その研究テーマは、「青年とは誰なのか」という問いについて、実証的なデータの蓄積にもとづきながら考察を深めていこうというものです。研究委員会が調査をおこないながら、研究テーマの深化をはかっていくという試みになります。

その手始めとして、来年開かれるワークショップでは、青年期の始まりや終わりに関する意識に関する自由記述の分析結果にもとづきながら、議論をしていきたいと考えています。会員のみなさんの積極的な参加を期待しています。

日時：2012年2月26日（日）午後2時～5時

場所：中央大学多摩キャンパス1号館1410号室

住所：〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

URL：<http://www.chuo-u.ac.jp>

最寄り駅：多摩都市モノレール「中央大学・明星大学」駅

問い合わせ先：manabu@tamacc.chuo-u.ac.jp 都筑 学（中央大学文学部）

＜事務局から＞

I.2012 年度大会について

次年度の第 20 回大会につきましては、次号のニューズレターに 1 号通信を同封します。開催場所と日程（予定）等が決まっていますので、お知らせします。

開催場所：武庫川女子大学 中央キャンパス

兵庫県西宮市池開町 6-46 阪神電鉄 鳴尾駅より徒歩約 7 分

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/access.htm#chuou>

準備委員長：佐方哲彦先生（武庫川女子大学文学部）

日程：2012 年 11 月 10 日（土）～11 日（日）

II.年会費の値上げについて

昨年度のニューズレター（54 号）にてお知らせしましたように、機関誌の年 2 号化に伴い、年会費を値上げせざるを得なくなりました。今年度の大会時の総会にて改めて財務状況の説明を行い、承認されましたので、お知らせいたします。以下にまずその額算出の根拠を説明し、併せて額をお知らせします。

機関誌は本年度分の 23 巻 1 号から年 2 号化を行っていますが、機関誌印刷（刷り上がり時の会員への一括発送費を含む）の増分がおよそ 800,000 円、2 号化したことによる大学・研究所等への売り上げの増分が 90,000 円であり、差し引き 710,000 円を補わなければいけません。これまででもできる限りの緊縮財政で運営してまいりましたが、本年度も、各種委員会への予算削減の依頼を行い、またニューズレターは 3 号すべてを機関誌や大会論文集と抱き合わせて発送することで、支出の節減を図ってまいりました。今後もそれは継続してまいりますが、会員数もここ数年頭打ちであり、年会費収入の他にこれといって収入増が見込めない現状では、上記の額を年会費の値上げによって補う他はありません。値上げ額につきましては、上記の不足額を上回る額であること、機関誌 1 冊の定価（機関への販売）が 2,500 円であること、学生会員への負担増はできるだけ少なくする方針であること、とはいえ機関誌の年 2 号化は学生会員へも恩恵となる点から最低限の受益者負担をしていただくことから、

正会員：年額 7,500 円（2,500 円の増）

学生会員：同 4,000 円（1,000 円の増）

との原案を提示し、総会にて承認されました。総会に参加されなかった皆様には、この額は初めてお知らせすることになりますが、昨年度のニューズレター 54 号以来、ご意見を募ってきた経緯もあり、この額にてご了承をいただければ幸いです。

なお現在の会員数をもとに積算しますと 955,000 円の収入増となり、不足額と比べると多めの額となりますが、(1)転居先不明者がいること、(2)滞納者がいること、(3)値上げしたことによる会員数の減少が予測されること、の三点から上記の額と致しました。仮に正会員の納入額を 7,000 円としますと積算額は 790,000 円となり、ぎりぎりの額となってしまうのです。会員の皆様にご負担増をお願いすることは心苦しいのですが、どうか退会や滞納をされることなく、皆様にご協力をいただけるよう、常任理事会としてお願い申し上げます。

また蛇足ではありますが、機関誌も年 2 号化を行いましたので、みなさま方からのより積極的なご投稿をお待ちしております。

III.会費の納入期限の変更について

このところ、大学の研究費で学会の年会費を支払う方が増えてきたことは前号でもお伝えしましたが、会員のなかから、その会計年度にならないと決済ができないという声がありました。そこで、従来「毎年 3 月末までに次年度の会費を納入する」となっていた会則を改

正し、「当該年度の5月末まで」と変更することになりました。この件についても、今年度の総会で承認を得ています。

したがって、前項の年会費の値上げと併せまして、会則第13条は以下のように変更になります。

(旧) 正会員の会費は当分の間、年額 5,000 円（ただし、在学中のものは年額 3,000 円）とし、毎年3月末までに次年度の会費を納入するものとする。

↓

(新) 正会員の会費は当分の間、年額 7,500 円（ただし、在学中のものは年額 4,000 円）とし、毎年5月末までに当該年度の会費を納入するものとする。

なお機関誌は毎年、年度前半発行の第1号が6月に発刊されることになっています。会員のみなさまのスムーズな納入をお願いいたします。

また大学の研究費から年会費を納めていただく際には、**必ず、ご本人から**学会事務局宛てに、「何月（何日頃）に〇〇大学から××（お名前）分の会費が納入される」というご連絡をメール等にてお送りください。

V.秋葉英則先生が名誉会員に推戴されました

今年度の総会におきまして、大阪教育大学名誉教授・大阪健康福祉短期大学学長の秋葉英則先生が当学会の名誉会員に推戴されました。名誉会員は、以下の条件を満たす方が推戴されることになっています。(1) 本会の正会員、または正会員であった方で、(2) 正会員から推薦され、理事会で審議され、(3) 理事会の3分の2の同意を得て総会に推薦され、(4) 総会で出席者の過半数の賛成を以て承認された方です。さらに、(5) 前年度末までに70歳に達しており、(6) 本会の運営に功績のあった方（本会の目的達成に著しい貢献、役員を9年以上歴任、およびこれに準じる貢献のある方）とされています。秋葉先生はこのいずれの条件も満たし、名誉会員となりました。

VI.第5回学会賞が決まりました

本年度は学会賞が選考され、表彰される年にあたります。機関誌の第20～22号に掲載された原著・資料論文のなかから、2段階の選考を経て、以下の方に決まりました。

白井利明会員

受賞論文「青年心理学研究方法論としての変容確認法の発展—発達主体として青年を捉えるアプローチ」（第20号掲載）

受賞者の白井さんには、大会総会場で受賞した旨が発表され、ご本人からのご挨拶がありました。後日、表彰状と記念品の置き時計が贈られました。

VII.会費の納入状況のお知らせについて

昨年度より、タックシールに付記して会費の納入状況をお知らせしています。この時期は、そろそろ次年度の会費を納めていただく季節ですので、みなさまに2012年度の納入も含めたご案内をしております。IIで述べましたように、2012年度分より年会費の額が変更になっていますので、特にこれまでに未納の分がある方は、正確に計算をいただき、併せて納入していただきますよう、お願い申し上げます。納入状況の記号は以下の説明と照合してください（支払う必要のある方には「払込取扱票」を同封していますが、そこにも同様の記載がございます）。なおこの記号は、1月5日時点のものをもとに作成しています。行き違いがございましたら、ご了承ください。

納入状況A：納入の必要はありません。

納入状況A－：2012年度分のみ、納入してください。

納入状況B：2010年度までは完納ですので、2011～12年度分の納入が必要です。

※正会員ですと、5,000円（2011年度分）＋7,500円（2012年度分）となります。

→このように年度ごとに正確な計算をお願いします。

納入状況C：2009年度までは完納ですので、2010～12年度の3年分をお願いします。

納入状況D：2008年度までは完納ですので、2009～12年度の4年分をお願いします。

納入状況E：（以下、未納の年数が1年分ずつ多いことを意味します）

入金振替口座は「00970-0-125990」です。2009年度までの振替口座はもう使用できませんので、古い振替用紙は使わないようにお願いします。また「学生会員」と「一般会員」の区別に注意してください。大学院等に学籍がある方は、オーバードクターや研究生も含めて、「学生会員」となります。未納年が複数ある方で、途中からこの区分が移行した方は納入額にご注意ください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0125990

※この当座預金口座には、銀行のATMからも入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録◆をしていればインターネット経由で入金できます（「ゆうちょダイレクト」からの振替は月5回まで手数料無料なので手軽&お得です）。

◆http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html

※会費を納めていませんと学会機関誌「青年心理学研究」は送付されません。2011年度までの会費を1月5日までに納入された方には今回、23巻2号を同封していますが、これ以後に納入された方への機関誌の送付は納入者が一定程度たまってからになりますので、2か月程度お待ちいただく可能性もございます。また、「青年心理学研究」への論文投稿と掲載も、当該年度までの年会費を納めていることが条件となります。

日本青年心理学会事務局

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

〒520-0862 滋賀県大津市平津2丁目5-1

滋賀大学教育学部 若松研究室内

TEL & FAX：077-537-7770

E-mail：seinenshinri@edu.shiga-u.ac.jp

Homepage：http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/

振替口座：00970-0-125990

口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけE-mailでお願い致します。